

「がん医療におけるコミュニケーション・スキル 悪い知らせをどう伝えるか」[DVD 付]

内富 庸介 編集
藤森麻衣子

国立がんセンター名誉総長

垣 添 忠 生

『がん医療におけるコミュニケーション・スキル—悪い知らせをどう伝えるか』が医学書院から刊行された。編集は内富庸介、藤森麻衣子の両氏、執筆は国立がんセンター東病院、同中央病院、聖隷三方原病院、癌研有明病院、静岡県立静岡がんセンターなど、いずれも日々がん患者や家族と濃密に接するベテラン揃いである。

患者、家族と、医療従事者との関係、特に患者と医師の間の意思疎通、コミュニケーションは医療の原点である。最近の診療現場の多忙さは危機的である。限られた時間の中で患者と医師がコミュニケーションを図ることは至難になりつつある。とはいえ、患者—医師関係を構築するうえでコミュニケーションは避けて通れない。

とりわけ、がん医療には決定的に重要なポイントがいくつもある。医師の立場から考えると、がんの診断を伝えるとき、再発、転移の事実を

伝えるとき、治癒を求める医療が不可能あるいは極めて難しいことを伝えるとき……いずれも患者と家族の命運を握る重大局面と言える。そうした重大な内容を伝える方法、技術を医師は学部教育でも、卒業後も系統的に学ぶ機会がないまま現場に立つ。

私自身、若い頃、膀胱鏡が終わって席に戻った患者さんに、なるべく気楽に受け止めていただくようにと考えて、やや無雑作に「膀胱にがんがありました」と伝えたら、膀胱がんの内容を話す前に、患者さんは失禁をし、イスから転げ落ちそうになった。以来、私は深刻に反省して、医療内容、とりわけ悪いニュースを伝えるときの伝え方を、極めて慎重に行うようになった。既に発表された研究成果を勉強し、学会や研究会でも聴講した。いわば、個人の努力でこうした技術を身につけなければならぬのは問題だと思った。

この書物には、医療現場での叡知

と、国内外の学問的達成が、最適の筆者らによって詳述されている。この書物を通読し、現場におけるこれまでの自分の対応を反芻すると、悪いニュースを伝える際の、コミュニケーションスキルがくっきりと見えてくるはずである。加えて、本書にはアストラゼネカ社の好意によってDVD も付されている。本書をわずか2,940円で世に送り出してくれた多くの関係者の努力を多としたい。

がんは、どのような医療現場でも避けて通れない普通の病気となった。医師として、あるいは看護師、薬剤師などの医療従事者として、がん患者と接するすべての人々に、本書の通読をお勧めしたい。そして、がん医療だけではなく、すべての医療現場に通じる普遍的内容が含まれていることを感知していただきたいと思う。

● A5 頁152 2007 定価2,940円
(本体2,800円+税5%)

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)